

武蔵野美術大学卒業制作

「環境音と音風景のナラティブによる地域の再発見」 制作ノート

造形構想学部クリエイティブイノベーション学科

岩寄博論ゼミ 鵜野響



はじめに	1
それぞれのサウンドスケープ	2
問い	3
環境音、音風景、サウンドスケープ	5
サウンドスケープ	5
サウンドスケープとサウンドスケープ・デザイン	5
マリー・シェーファー『世界の調律』	7
サウンドスケープ・デザインの実践	13
地域におけるサウンドスケープ・デザインの実践	14
サウンドスケープ・デザインの実践の課題	18
音の資源化	19
音と人間の関わり	21
騒音公害	21
ポータブルオーディオ、ノイズキャンセリング	21
音響性難聴	21
記録の音と記憶の音	23
記録の音	23
記憶の音、音の記憶、イメージの音	23
音に触れる	25
耳を開く、目を開く	25
聴覚の拡張	25
マイク	26
ワークショップ	26
地域の物語と地域の音風景	29
地域の音風景とその課題	29
ナラティブ	31
町歩き	32
地域の音の図解	33
プロトタイプ	37
場所の検討	37
フィールドワーク	38
プロトタイプのブラッシュアップ	47
音風景の観察ガイド	49
道具の解説	53
おわりに	57
引用／参考	59

はじめに

卒業研究について考えるなかで、以下のような事柄への漠然とした関心と興味があがった。

- 環境音、音風景、サウンドスケープ
 - 場の音
 - 記憶の音
 - 地域の音風景（サウンドスケープ）
 - 地域の人々によって認知される、地域の音風景
 - 地域にとっての環境音、その象徴性
 - 個々人の捉えた音風景をいかに「地域の音風景」として確立するか
 - 個人の音風景
 - 人々はどのように環境音を捉えるのか
 - 音のナラティブ（個別的なストーリー）
 - 音風景の個人差
 - 環境音や音風景のためのソフトやハード、作品制作
 - 地域の音風景や地域の音像を自認するための方法、手法の提案
 - 音風景の共有の手法
 - デバイス／サービスマッピング／ビジュアライズなど
 - 地域にとっての象徴性を理解するための、デバイス／サービス、マッピング／ビジュアライズ
 - 個人の音風景の統合、解析
 - サウンドマップの統合、解析
 - 音風景のナラティブの統合、解析
 - 音に耳を傾けるデバイス、音集めのデバイス
 - 環境音の録音、環境に音を流すこと

また、そもそも音への関心の根源には、音の持つ性質以下のような関心があると考えられた。

- 全方位性
- 個人性
- 非匿名性と匿名性
- 空間解像度（空間を反映すること）
- 人間の快・不快への強い影響力

それぞれのサウンドスケープ

中学高校時代、北海道の人口4000人以下の港町に暮らしていた。自然資源が豊富で、農業や漁業も盛んで、冬は雪が降った。1年を通してスポーツやアウトドアにも取り組み、スキーやセーリング、登山などを行っていた。この環境に暮らしながら、年に数回は東京に滞在し、また遠征などのため紋別、札幌、小樽、室蘭、函館、岩手、小笠原、石川、京都、山口、福岡、佐賀、熊本、沖縄、シンガポールなど、各地を訪れる機会がたくさんあった。大学へ入学した後も、ふたたび体験した東京での暮らしに加え、滋賀、宮崎などの地域に新たに訪れ、以前よりも深く関わる機会があった。

高校時代、それまでアコースティックの楽器や電子楽器、DTMに触れていたなかで、音楽や音そのものへの関心が高かった。このような背景から高校の卒業制作では、普段暮らす北海道と、ときどき訪れる東京での体験のギャップから、都市と田舎それぞれの地域の環境音やサウンドスケープに関心をもち、環境音を扱った。大学でも音を対象に制作を行うことは何度かありながらも、高校時代に感じた作品制作の限界などから、環境音についてはあまり扱うことはなかった。

音は大気中に存在する我々の身の回りに常に存在し、聴覚は睡眠時にあっても活動している。常に音に囲まれる中で、周囲のひとつひとつの音への関心は下がり、それぞれがどのような経緯を持って発され、それを人々がどのように受け取っているのか注意が向きづらくなっている。この傾向は、高度に工業化され機械化されてきた現代においてますます強まっており、都市人口の増えてきた近代世界にとってより大きな課題となってきた。人間の活動の拡大に伴って発生する音も拡大し、やがて騒音公害としてこれを抑えたり、隠す取り組みが行われてきた。さらには、元来そこに存在してきた環境音さえも騒音と捉え、打ち消し、隠蔽、隔離、排除してきた。このように、音と人との関係が希薄になってきた中で、地域や社会における音風景の意識も低下し、失われている。現代社会は、音声や音楽などの複製された音が溢れたことで、地域固有の音が忘れられ、場への意識や共同体の意識までもが低下しているのではないだろうか。

美術大学の学生としてこれまで地域に関わってきたなかで、いわゆる「まちづくり」的な領域や、体験、産業の価値などには取り組めたものの、ひろく「音」について注目されることはなく、取り組まれにくいことを改めて感じてきた。地域には、産業や文化などによる地域ならではの独特の音が存在し、それがそこに暮らす人々に意味するものも独自のものではないか。

本研究では、音を風景の観念でとらえ、さらに音を巡る関係性にも注目し、関わり方を考える「サウンドスケープ（音風景）」に着目、ひとりひとりのもつ音風景から「地域の音風景」を探ることはできないか、ひとりひとりの音風景との関わりが、固有の物語「音風景のナラティブ」として、環境音に意味や象徴性を与えると考えた。サウンドスケープや音風景、環境音の領域と、大学で取り組んだの交差点として、環境音を通して自分自身と地域を振り返ることで、よりよく知ることができるのではないか、という問いから、「個人の音体験や音経験の再認識のためのデザイン」「環境音を通した日常や地域の音風景の再認識のためのデザイン」を目指して取り組んだ。

環境音、音風景、サウンドスケープ

サウンドスケープ

サウンドスケープとサウンドスケープ・デザイン

サウンドスケープとは、1960年代にカナダの作曲家 レイモンド・マリー・シェーファー（Raymond Murray Schafer）によって提唱された概念である。日本語では「サウンドスケープ」のほか「音風景」「音景」などと呼称される。「Soundscape」は、Landscape の「Land」を「Sound」に置き換えた造語であり、音を環境から切り離し、客観的に取り扱うようになっていた当時、音をふたたび風景の観念でとらえ、音を巡る関係性にも注目し、関わり方を考えるために提唱された。

一般社団法人日本サウンドスケープ協会（The Soundscape Association of Japan）によれば、
「（サウンドスケープは）専門的には「個人、あるいは社会によってどのように知覚され理解されるかに強調点の置かれた音環境。それゆえサウンドスケープは、個人（あるいは文化を共有する人々のグループ）とその環境との間の関係によって決まる」（A Handbook for Acoustic Ecology, B.Truax ed., 1978）と定義されています。」
で、また、
「地球上のさまざまな時代や地域の人々が、音の世界を通じて自分たちの環境とどのような関係を取り結んでいるのか、どのような音を聞き取りそこからどのような情報等を得ているのかを問題とし、それぞれの音環境を個別の「文化的事象／音の文化」として位置づけます。したがって、サウンドスケープとは「世界を聴（聞）く行為、音の世界を体験する行為によっておのずと立ち表れてくる意味世界」であるともいえるのです。」（日本サウンドスケープ協会 , n.d.）
という。

また、
「音楽や言語といった「人為・人工の音」はもとより、潮騒や風の音、虫や鳥、動物等の生物の音などの「自然の音」、さらに「静けさ」や「賑わい」といった音環境の特定の状態をも問題にします。また、個別の音を問題にする場合にも、その音をそれが成立する環境全体の文脈のなかに引き戻し、その内容を把握しようとすることを特徴とします。」
といい、
「私たち一人ひとりが、自分自身の日々の生活に根差して、これまでバラバラになりがちだった、科学、芸術、各種の社会活動をつなげながら、音の世界（さらにはそれを切り口とした環境）を把握し、その内容を人々と分かち合い、これからの真に豊かな生活を構想し、その実現をめざすのが、サウンドスケープの考え方なのです。」
と形容している。

日本でサウンドスケープにまつわる活動を積極的に行っている小松正史は、自身の著作『サウンドスケープの技法：音風景とまちづくり』（2008）のなかで、サウンドスケープ論の特筆すべき点は、「目に見えない音を軸に、環

境を再認識することにある」と述べている。あわせて、サウンドスケープは「身のまわりの文化や社会にひそむ「無意識／潜在的領域」を、音から気づかせる企みでもあり、音を切り口に世界を眺め、考え、分析し、実践する行為が、サウンドスケープ活動だ。」とも述べている。
従来の音環境へのアプローチと異なる点として、鳥越けい子（2018）は、「耳でとらえる音だけではなく、記憶やイメージをも含めて環境を捉えて考えていく概念である。」と述べている。

サウンドスケープの研究について、提唱者であるシェーファーは、「人間とその環境の音との関係は何か、またこれらの音が変化する時に何が起きるのか。サウンドスケープ研究とは、これらさまざまな研究を統合する試みである。」（Schafer, R. Murray., 鳥越けい子・世界の調律：サウンドスケープとはなにか , 2006）と述べており、これまで「物理的／心理的／生理的」を扱ってきた音の科学に対し、サウンドスケープ論は、「地理的／社会的／文化的／歴史的／美学的」その他を含む横断的な研究領域である。

このように、ただ空間の環境音や音によって構築された音の像だけでなく、聞こえない音や音の背景、人々との関係、また、多くの他研究領域までもを対象としていることが、サウンドスケープ論の特徴である。

サウンドスケープの立場

シェーファーによれば、これまでの音にまつわる研究（音響学や音響心理学、耳科学、国際的な騒音規制の実施とその手続、通信と録音の技術（電気音響学、および電子音楽）、聴覚のパターン認識、言語や音楽の構造分析など）は、互いに関連しており、それぞれが世界のサウンドスケープの異なった側面を扱っているという。さらに、これらに携わる研究者たちは同じ問題（人間とその環境の音との関係は何か、これらの音が変化する時に何が起こるのか）を問いかけているとし、サウンドスケープ研究は、これらを統合する試みだという。
なかでも、彼はサウンドスケープを「科学、社会、芸術の三者の中間地帯」と位置付けており、音響学や音響心理学といった科学的側面によって、「音の物理的特性、人間の脳によってどのように解釈されるか」を追求し、「人間が音に関してどのような行動をとり、音が人間に対してどのような影響や変化をもたらすか」といった社会的な側面も重視しつつ、「もうひとつの別の世界（想像力、心霊瞑想の世界）のために人間がどのような理想的なサウンドスケープを創造するのか」といった芸術（特に音楽）的なアプローチによって、彼の提唱する「サウンドスケープ・デザイン」という新たな学際領域があるとしている。

サウンドスケープ・デザイン

機械と大量生産に美学をもたらし、インダストリアルデザインという新たな分野を生み出したバウハウスになぞらえ、世界のサウンドスケープは、我々が手を下すことのできない不確定な作品であるから、形式や美を与える責任を担うとしている。作曲家でもあった彼は、「音を出すすべての人、すべてのものが音楽家」であると捉え、「近代人にとっては音を生み出すことは主観的な問題」だから、サウンドスケープ研究は「世界の音の影響の調和を追求」し、「地球の調律の秘訣」を見出すという目的を提示している。その始まりとして、ある社会の一般的な音環境から、それ

地域の物語と地域の音風景

地域の音風景とその課題

地域の音風景について、梶間奈保は『地域における音風景の研究(1) 各地域の取り組み事例の整理と課題』(2015)の中で、

「地域の音風景の選定や発表が中心となっており音風景が地域にとってどのような存在なのか不明瞭な点もある。つまり、音に対してステレオタイプ化して考えるのではなく、私たちがどのような音環境に存在し、それらの音風景とどのような関係であるのか。また、音風景が地域にとってどのような存在であるのかといった点において明らかにする必要がある。」

と述べており、地域の音風景を捉える際のサウンドスケープ論の姿勢を改めて指摘している。

また、受け手（聞き取る人）の印象や感じ方に言及して、

「残したい日本の音風景100選」の≪遠州灘の海鳴り・波小僧≫（静岡県遠州灘）では「ゴォーゴォー、ザーザー、ドォードォー 生きた自然をそのままに伝える重厚な海鳴り」と記載されている（環境庁, 1997）。しかし、この音風景の推薦者は「ドドドン、ドドドンと太鼓を打つように、高く低く休むことなく鳴り響くのが遠州灘の波の音」（鳥越, 2008）と述べられている。両者ともに、遠州灘の波の音を表現した擬音語ではあるが、表現の仕方によって音の鳴るさまや音の空間性、それをどのように受け取っているのかといった受け手側と音風景との関連性が関係している。また、同事業で選定された≪碁石海岸・雷岩≫（岩手県大船渡市）では、2011年3月11日に発生した東日本大震災によって音に変化がみられたともいわれている。

以上のように、1つの音風景であっても、音の情報のみならず、その音を取り巻く物理的な環境や受け取り手である私たちの記憶や感覚が深く関連しており、それらを含めて音風景として再認識する必要がある。これは、音風景の概念、つまりサウンドスケープ思想の重要な要素である「意味論的音環境」の考えである。」とし、地域の音風景を研究する際の環境音の意味や象徴性に触れている。

この点、岩宮(2000)は「意味論的音環境」について「日々の生活において、実際に聞かれている音環境の把握」に加え、サウンドスケープ論の特徴として「音と人間と、その音の聞かれた（出された）状況（コンテキスト）の相互作用を重視」していると指摘している。つまり、「音と人々を切り離して捉えるのではなく音が人々とのように関連しているのか、また人々が音をどのように認識しているのかといった、双方向からの分析において考えていかなければならない。」(梶間, 2015)

という。

鳥越(1997)も、「聞こえる音ばかりではなく、「記憶やイメージの音」も忘れてはならない重要な要素」と述べており、「音を介した体験が文化を形成し、それが人々が生活してきた証である」(梶間, 2015) のだ。

梶間は、小松(2013)が指摘した、日本の行政や自治体による〇〇県の音風景、残したい音風景〇〇選などの音風景事業が陥った「自然音が無条件に人々に良い影響を与えるといった風潮」「「きれいな音」「心地よい音」に対する快の価値観のみに着目する偏り」に対し、住民が提案者となり地域の魅力を発信した例として、「ながさき・いい音の風景」や「平野の音博物館」を挙げ、それらが「音と自分との内面的な関係性を探求していく音の捉え方を基本としている」点を紹介している。そして、「まちづくりと音風景の関連性の中には文化や一人ひとりの音に

対する記憶といった、数値や評価では測ることができない質的かつ、多様な考えを捉える必要性がある。これは、音と自分との関わりを見つめる、音を通したアイデンティティーの確立が強いといえる」としている。

一方で、地域らしさを発見し音風景として選出、認識されることで観光資源として発信できるアプローチの有効性も述べている。その上で、

「音風景は大きく分けて2つの目的によって事業が展開されていく。1つは騒音レベルや生活改善など量的レベルの視点を持つ音環境の見直しと保全、そしてもう1つはまちづくりを主な目的とし、音風景を1つの切り口として捉える地域らしさの創出である。」

と地域の音風景事業の目的を挙げている。

梶間は同論文で、地域の音風景事業の課題に、第一に「音風景事業の取り組み後の地域との関連性」を挙げている。つまり、音風景事業に取り組むまでの一般公募や音環境の調査など地域住民の声に寄せた明示された活動に対し、選定された音風景がその後、地域住民とどのような関わりを持ち地域と関連し合っているのかといった、その地域の音風景の在り方の継続的な分析が不明瞭である、ということである。そして、「資料作りやデータ配信といった目に見える形とは違った音風景と地域との関わり方を提示する必要がある。」と述べた上で、「平野の音博物館」では(中略) 音風景を介したまちづくりや都市計画事業について「行政主導型・一過性のイベントや調査」であることを指摘した上で、「後世への伝承まで含めた住民主体の事業」であるべきだと述べている。」と紹介しており、その重要性を指摘している。

さらに、「音風景を音環境の見直しとして意識啓発させる事業として捉えるのではなく地域住民が意識して改善していくことや、地域らしさの創出を住民主体となる活動が必要である。」とし、「その地域にとってどういった音との向き合い方が望ましいのか、地域住民が地域の音をどのように考え生活をしているのかどうかをしっかりと分析することが必要」と述べている。

「辻本(2012)によれば「選定する作業は成功しても、それを保全し、残すというもう一つの作業には多くの問題が残っている」とし、「人々の関心を維持することの難しさが明らかにされている」と述べている。」と引用し、あわせて「「上から下へのデザイン=傲慢」(鳥越 2008)「下からのサウンドスケープ・デザインの限界」(小松 2013)との指摘」も紹介している。その上で改めて、

「音の変容性や受け手側の音に対する多様な考え方をどのように組み入れ、なおかつ地域との関連性を明示し継続事業として展開していくのかは、画一的な取り組みではなく、各事業各地域それぞれに分析し音風景の在り方を考えていく必要があり、音風景に関する取り組みの大きな課題といえる。」

と述べている。

次に、「音風景という用語の捉え方が広範囲であることも課題」としており、

「音を通して地域の再発見や音環境の改善を目的として取り組まれており、その地域に住み、日々の生活の中で感じることを音風景の発見と重ねて発信することが重要」な取り組みは、そこで選定された音風景が、「地域外の人間では分からない場所や「これが音風景だ」と感じるものが難しいものも存在している。」

と指摘している。一方、「個人の趣味範囲での情報発信も含め、不特定多数の人間が、自分の視点に立った音風景について語ることができ」「その地域に居住していなくても、地域の音風景の提案者として情報を発信することが

プロトタイプ

これまでのサウンドスケープのフィールドワーク手法やリサーチを参考に、地域と自分の再発見のためのアウトプットの制作に向け、自ら体験と検証を行った。これにあたり、インタビューやワークショップ、デバイスの制作など、以下のようなアイデアを検討した。

- マイクで音を聞きながらまちを歩く
- 寝っ転がってよりよく聞く
- 普段の生活圏とは違うところで音をよく聞く
- 音のワークショップのアーカイブ
- 知らない場所に行って音を聞く
- 地元が違う二人がお互いの地元に行く、音を聞く
- 音による観光プログラム
- 地域外者と地域内者の視点の比較から地域の音風景を探る、再認識を促す
- 写真を撮ろうとする普通の観光に対し、目隠しで視覚を遮断して音を観察する
- いろいろな聞き方の検討（マイクを通す、目を閉じる、目隠しをする、立ち止まる、寝っ転がる）

この中から、関心に近い部分に有効と思われた「改めて音をよく聞く活動」「知らない地域に行ってみる／連れて行ってみる」「音を聞きながらの町歩き」を実践・実証することとし、内容と候補地を検討した。

場所の検討

フィールドワークを行う地域を探す中で、東京から程よく離れていながら、半島で海と山があり、小田原と熱海の間にあるなど、地理的に面白い神奈川県真鶴町が候補に挙がった。

真鶴町には、独自のまちづくり条例「美の基準」があり、高度成長期の乱開発に影響されていない町並みをとどめている。また、真鶴町にある泊まれる出版社「真鶴出版」は、地域の情報の発信と訪れた人と町歩きをするなど、地域に根ざした活動をしている。

そんな真鶴町でのフィールドワークに先立ち、まずは町を訪れてみた。実際に訪れてみると、思っていた以上に地形が特殊で、高低差がしっかりとあり、山から海まで自然が豊富で、寝転がれそうなこと、また交通音などを含むさまざまな音源が存在することがわかり、ここでフィールドワークによるプロトタイプを行うこととした。

フィールドワーク

訪れたことのない地域で音を聞く体験について、神奈川県真鶴町でフィールドワークによるプロトタイプを行い、検証した。

このときは、真鶴町の地域の音風景を探ることも目的としていたため、そのような視点からの設問や調査内容となっている。

リサーチの目的

特定地域（フィールド）での音体験、そしてその振り返りを通し、「これまでの音経験や音感覚を再認識」することで、「社会や生活を再認識すること」、「地元や現在の居住地域、調査地域の新たな魅力を発見したり、地域への理解」を深める。

また、グループでフィールドワークを行い、同地域での「他者の音体験／経験」を参照し、対話することで、「その人のその地域における音経験や音感覚」を確立し、また、「その人にとっての“その地域”」を再認識する。同時に、調査者自身もこの調査を体験し統合することで、「“その時、その人々にとっての”その地域の音風景」の象徴性を探り、新しい体験による地域との出会い方や、地域における音風景の利用可能性を検討する。

リサーチの流れ

10:55-11:50	これまでの音体験と地域についてのアンケート	@荒井城址公園
11:55-12:15	耳をひらく、自分の音を聞く	@荒井城址公園
12:15-12:40	寝っ転がる、まちの音を聞く	@荒井城址公園
14:00-15:00	環境の音を聞き分ける	@真鶴半島自然公園、真鶴岬
15:15-16:50	まちを歩く、まちの音を聞く	@真鶴駅〜コミュニティ真鶴〜役場〜真鶴駅
17:05-18:15	一日の振り返りと音や地域についてのアンケート	@真鶴港

リサーチの概要

日時：2022年11月11日（金）10:55-18:15

場所：真鶴町荒井城址公園、真鶴半島自然公園、真鶴岬、真鶴港、真鶴市街など

人数：報告者を含む4名